なけなし!

合同授業

エレクトラに言われた通り、ネイは合同授業に参加している。

うっとおしいことに、ドレスなんて着て。
ネイはこの合同授業が好きでないが、工場長はとエレクトラはせっせと新しいドレスをネイに与え、
（二人で買いに行ったそう）楽しみにしていたようだ。
最近ネイが娘らしくなったと、二人は飾り付けたがって仕方がない。二人で膝つき合わせて、喧々諤々、ネイに似合う色を議論しているのも見たことがある。
何だかこそばゆいものを感じながら、ネイはこのドレスに袖を通した。

そのエレクトラ先生は、今は遠く、シロバンチョーと喋っているのが見える。
沢山の生徒達とそれぞれの先生がおのおの歓談しているのだ。
シロバンチョーもサボりがちだがちゃんと来たらしい。クロマオーのカタキである。
ネイは複雑な気持ちに陥り、グラスに視線を落とした。

グラスに鮮やかな赤色が映る。
顔を上げると、そこには友達のシャジィがいた。シャジィのドレスの色だったんだ。

シャジィ「や、オーガスタ。」
ネイ「シャジィ。久しぶりじゃない？」

久々に見るシャジィは、とても浮かれて、楽しげに見えた。
シャジィは話したくてたまらない気持ちを何とか抑えてるようだ。

ネイの話を引き出そうと躍起になってる。
そこそこに話を切り上げ、ネイは訊いてあげることにした。

ネイ「何かいいことあった？」

誰かがグラスを割ったと、会場内がざわめいた。
ネイがよそ見をした隙に、シャジィはネイの耳に口を近づけ重大な告白をした。

シャジィ「先生に告白されたの。つい、さっき。」

シャジィは顔を真っ赤にして、熱でもあるようにうっとりと目を細めた。

ネイは聞かなかったことにしたい気持ちでいっぱいになった。何でよりによって自分に言うのだろうと思う。
てっきり、相手はこの会場にいる同年代の誰かだと思った。
とりあえず理解を示さねばなるまい。

ネイ「すごいね。何て答えたの？」
シャジィ「前から大人が良いと思ってたの。落ち着いてるし、お金もあるし、カッコイイでしょう？『はい』ってすぐ答えたよ。」
ネイ「でもそれって、きんだんのあいってものじゃないの？」
シャジィ「言わなきゃ分からないわ。それに燃えるじゃない、その方が。」

シャジィはネイと同い年だ。
ネイはそっと窓に映る自分の姿を見つめた。確かに最近、工場長や先生が言うように、女らしい体になってきた。
昔はネイくらいの歳で結婚するものだと聞いたこともあった。
自分達の回りでそういう話があっても全然おかしなことじゃないのかもしれない。

ネイ「オトナだね〜〜。」
シャジィ「だって、男の子達ってガキじゃない？ほらあっちでも、じゃれあって、犬みたいね。そんなの相手に出来ないもん。バッカみたいね。」

視線を送れば、男の子達がテーブルクロス引きをやると騒いでる。賢い少年が割れるものだけ取り除き、運動神経のいい少年は真っ直ぐに引けばいいとレクチャーしている。が、結局は遊びの範囲だ。
男の子達は遊びに夢中で、滅多に女子の所には来ない。来る時は恥ずかしそうで、皆にもからかわれる。

元気で、正に犬みたい。
でもネイは、そんな男の子達を見るのが好きだった。

シャジィ「今日、先生と一緒に帰るの。」
ネイ「送ってもらうの？」
シャジィ「うん。あの、うちに誰もいないの。」
ネイ「うん。」
シャジィ「だから何か起こっちゃっても不思議じゃないの！！！」

綺麗な赤いドレスより、シャジィは顔を赤くした。
期待しているということだろう。

ネイは掴みどころのない不安に、シャジィを見つめた。

ネイ「何かって？」
シャジィ「知らないの？」
ネイ「ぼんやりとは……分かるけど。」
シャジィ「はっきり分かったらコワいわ。だってネイまだでしょ？私がこの中じゃ一番乗りかもね。」

ネイはいよいよ黙り込んだ。知らないことは話せないし、あんまり話すことじゃない気がする。
つまり『燃えてる』状態のシャジィに何と声をかけたら良いのか分からない。

とりあえず、オレンジジュースを注ぎに場を離れる。

戻ってくるとシャジィはすでにいなかった。
帰ったのだろうか。

探したいとも思わず、椅子に腰かけてぼうっとする。

こわいはなしを聞いた気分だった。

しばらくして、シロバンチョーが突然脇に座った。
好奇の視線が一斉に降り注ぐのを感じる。

シロバンチョー「オーガスタ、じゃなくて、ネイか？」
ネイ「あなたはどっちでもいいんじゃない？」
シロ「冷たくするなよ。」

ネイ「早くあっち行って欲しいんだけど。」
シロ「何でそんなに嫌いになったんだ、お前は。」
ネイ「色々あるの。派閥とか、男女とか、色々あるの！」
シロ「面倒だな。」
ネイ「何か用なの？」
シロ「家に遊びに行っていいか？」

そこでピューーーッとお調子者の誰かがが口笛を吹いた。

ネイ「面倒なんだけど！」
シロ「そう怒るなよ。」
ネイ「勝手にすればいいじゃない。」
シロ「怒ってるのに、勝手に出来ない。」

シロバンチョーは、眉を情けなく下げた。
その顔は叱られたみたいだった。

可愛い所がある。
男の子達は可愛い所があると思う。

ネイは可哀想になって、シロバンチョーに囁いた。

ネイ「うちにはクロマオーもいるんだよ。」

急に内緒話になったので、周囲も放っておいてくれるようになった。
幾分気が楽になり、シロバンチョーも小声で応じる。

シロバンチョー「そいつに会いたいんだよ。」
ネイ「分かってるの？あなたは１０年前のカタキの息子なんだよ。」
シロ「とりあえずは秘密にするしかないだろう。」
ネイ「そんな騙すようなことして何がしたいの？」
シロ「相談だ。」
ネイ「何の？夜ごはんの相談とか言ったらとっちめるよ！」
シロ「……分かるだろう？」
ネイ「ぼんやりとは……分かるけど。」

ネイだって知っている。

シロバンチョーには噂がある。
自分の父が倒したマゾクと懇意にしているという。

シロバンチョーは眉根を寄せ、深いため息をついた。

シット！

ドレスの裾を気にしながら、降り立つ。出迎えの執事と、横には何故かクロマオー。

ネイ「なに？」
執事「オーガスタさま、この者が言うことは本当でしょうか？オーガスタさまが先日の階段おろしで足を痛めて、この者が運んだというのです。だからオーガスタさまを出迎えて、運びたいと懇願するのですが。」

階段おろしとは先日の十四歳ですると言っていた行事である。
ネイはとりあえず調子を合わせた。

ネイ「クロマオー、言うなと言った筈よ。」
クロマオー「しかし、無理をするのはよくないであります！大事を取るのは肝要なりです！」
執事「そうですか……。よし、おまえ。おまえは一番体がでかい。オーガスタさまをお運びしなさい。」
クロマオー「ガッテン、承知いたした！」

ネイは何度目かになるお姫様だっこを受けて、「これを着ているとなかなか気分がのるな！」と変にドレスを肯定した。
執事が御者と話しているうちに、足早に屋敷に入った。

ネイ「どうしたの？急に」
クロマオー「別に何でもないんだ。顔見たら、何でもないんだ、僕は。」
ネイ「？」

クロマオーは感じがいつもと違っている。よく分からないが、男の子はこういう時があるのかもしれない。

ネイ「クロマオー、聞いて。今日ね、友達に彼氏が出来たんだって。」

無言に耐えかねて、ネイは話を始めた。特にクロマオーに言うことではないのだが。
クロマオーはそうと短く相槌を打つ。

ネイ「それがせんせいなんだって！」
クロマオー「じゃあそいつ変態なんだよ。」

即座に切って捨てられ、ネイはむっ、むっとする。

ネイ「友達は魅力的な子だよ。」
クロマオー「それ本当に友達の話？」
ネイ「そうだよ。」
クロマオー「じゃあネイちゃんはそっとして、あまり関わらないようにするんだ。」
ネイ「ねえ、ちゃんと話を聞いて。」

クロマオー「一緒に育つから嬉しいことが二倍になる。その男も、悪いがその友達も、自分の歳すら分からないような馬鹿だよ。相手にすると、迷惑が二倍になる。」

クロマオー「自分のことをひとつ、理解することができない奴に、誰かを愛せるはずもない。」

何故かクロマオーが怒ってる。
ネイは困ってしまい、クロマオーの腕の中で、とても孤独な気持ちになった。

ネイ「だって恋してるのだから、いいじゃない。もう結構オトナだよ。」

ネイ「好きな人が出来たら、一緒にいたいのは当たり前でしょう？」

クロマオーは一度口を強く引き結んだ。そして意を決したように、難しい顔で、ネイの顔を覗き込んだ。

クロマオー「ネイちゃん、それは恋じゃないよ。」

クロマオー「それは性だ。」

クロマオー「本当の恋は思いやりと労わりがある。脳でするものなんだ。」

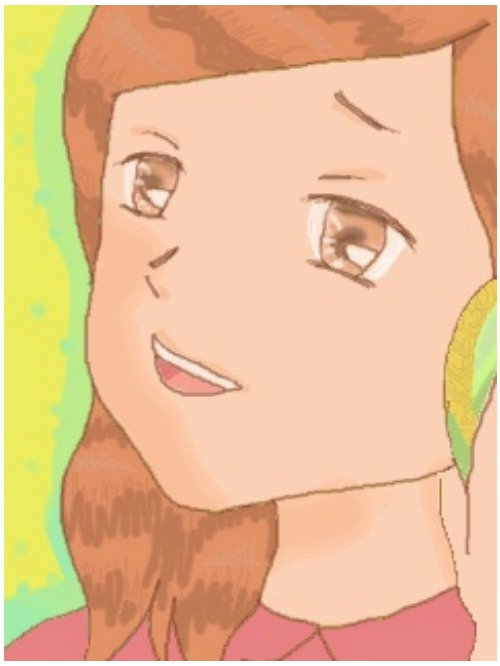
クロマオーはネイを降ろし、一礼した。
そのまま何も言わず、マゾクリキシャになりきって去ってしまった。

本当に正しいことは何だろう？
きみはどう思う？

それから二週間経った。
一度シロバンチョーが遊びに来て、工場を見学していった。工場長が率先して対応した為、ネイや、クロマオーは殆ど近づけなかった。
シロバンチョーは皆さんに、とお団子を配ってくれた。
クロマオーの串にだけ、「はなしがしたい」と書いてあった。何だこれ……。
オフィスラブ式だんごを周りから見えないように懐に入れて、遠くのシロバンチョーに向けて頷く。
しかしどうしたらいい？

日は過ぎ、先に述べた通り二週間、ぐるっと回ったのだ。

電話が鳴った。夜十二時を過ぎた頃で、ネイは本を読んでいた。
そろそろ眠ろうかと思っていた頃だった。



シャジィ「オーガスタ。」
ネイ「シャジィ、なあに。」

シャジィは突然泣きだした。電話口の奥で、声が震えている。
ネイは一つの恋が、終わったのだと悟った。

ネイ「大丈夫。順番に、ゆっくりと話してごらん。」

シャジィはせんせいと恋をしたつもりでいた。
しかしせんせいの本当に好きなのはグルッテラリスクの女主人。

写真を持っていたという。
シャジィは頑張った。
まだ自分が出来る前の恋だったから、何でもした。
まだよく分からなかったから、せんせいの家にも行きたいとか、
せんせいが来るまで自宅の前で待ち続けたりした。
せんせいの絵を描いて渡した。
憧れのせんせいに触られたことが嬉しかった。
大人になったと思っていた。
せんせいが辞めると聞いて、
じゃあどこで会えると飛びついた。
ところかまわずシャジィはくっつきたがった。

せんせいはもう会わないと言った。

周りの大人に言いたいなら言えば良い。
きみがどれだけお尻が軽くて、
頭も悪いのか、みんなに知れ渡るだけだから。

せんせいは冷たい目で、そう言っていなくなってしまった。

親は忙しく、
懐いてるせんせいがいて安心していた。
言えなかった。
自分がどんなことをしていたのかなんて、言えなかった。
自分が恥ずかしい。
親は今でも、自慢の娘だと思っている。

ネイ「シャジィ、あなたは何も変わってなんていないよ。」
シャジィ「そんなことない。そんなことない。」

見えない傷が、
胸から腹を切り裂く。

憧れは壊してはいけないもの。

壊れた瞬間に、希望全てを失うから。

シャジィを慰めるのに、何と言っていいかネイは迷った。

ネイ「ポジティブに考えて。好きになった人と、一時でも一緒にいられて良かったと。普通の子は経験できないことなのよ。きっとシャジィが綺麗だからよ。自信を持って。」
シャジィ「わたし……。」
ネイ「そうだよ。シャジィは綺麗。これからだって幾らでもカッコイイ人が声かけてくれるよ。」

シャジィは言うか言わぬか迷うように、すこしの間黙った。
頭の中で、自分の人生がどういう方向に行くかも想像する。
仮にオーガスタが言うように、綺麗だったとして、
沢山の男に声をかけられたとしても。

シャジィ「わたし、わたしを好きになれない。」

とても惨めで可哀想だ。今の自分は、終わっている。

ネイ「じゃあ、まず好きになるように、頑張ってみたら。」
シャジィ「オーガスタが羨ましい。シロバンチョーなんて彼氏もいて。」
ネイ「それは違うけど、んーー。私は考えたら良いと思う。」
シャジィ「……。」
ネイ「そのせんせい、ろくなもんじゃないよ。愛というのは、思いやりと労わりがあるものよ？せんせいはシャジィのこと何も考えてくれてないでしょ？そんなオトコ、どうでもいいじゃない。」

受け売りだ。

ネイ「よーく考えて。自分を好きになる為に、何か始めてもいいわ。焦らない、自分を安売りしないんだよ、今度は。」

ネイ「誇りを持って。」

女の子は誇り高くなければいけません！

面倒だなとは思うけど、うんこを我慢することは出来ない。（ソトゥール・バーコン）

昔背伸びして読んだ帝王学の本を思い出しながら、クロマオーはそそくさと庭に出た。うんこという呼び名を彼が使ったのは、彼がヒトに理解のある方だったからだと聞いた。実際、クロマオー達マゾクはうんこをしない。

ヒトはうんこを忌み嫌うという。

ネイちゃんもうんこしてるのだろうか。考えてしまったことに急に恥ずかしくなり、頭をぶんぶんと振る。
きっとネイちゃんもめったにしないんだ。

クロマオーはあくびをするように、口から玉を出した。淡く光る綺麗な玉。

これはクロマオー達マゾクが一日に出す、エネルギーの殻である。
マゾク達がちょいちょいパンツを穿いてないのは、殻は口から出すからなのだ。

しかしクロマオー達にも生殖器とおしりは存在する。ほとんど外気にさらすことはないので、クロマオーも見る機会が少ない。
マゾクは一般に、恋も計画的に、季節で始まる。
まだマゾク達が男女一緒にいた頃は、毎年寒くなる頃集まっていたという。
だからネイの話を聞いても、ピンとこないのが本当だった。

クロマオーにとって、恋とは自分の近くから始まることだった。

季節になり横の誰かと子供を儲ける。そういうことだった。
自分にごく近いものを選ぶのが一般的で、
幼すぎるものは相手にならなかった。

ヒトは一部、妄想で動くものがいる、とクロマオーは思う。

以前のラタームの時も思ったけれど、『いけないこと』に自分を酔わせ、対象の痛みなどお構いなし。
ネイと同じくらいの子に手を出すなんて、きっと、そういうのが、そういう奴らにとって興奮するのだろう。

誰がどう見ても、ネイはまだ少女だ。ネイと同じくらいなら、みんなどんぐりの背比べだ。

……。

……。

本当にネイの話じゃないんだろうか……？

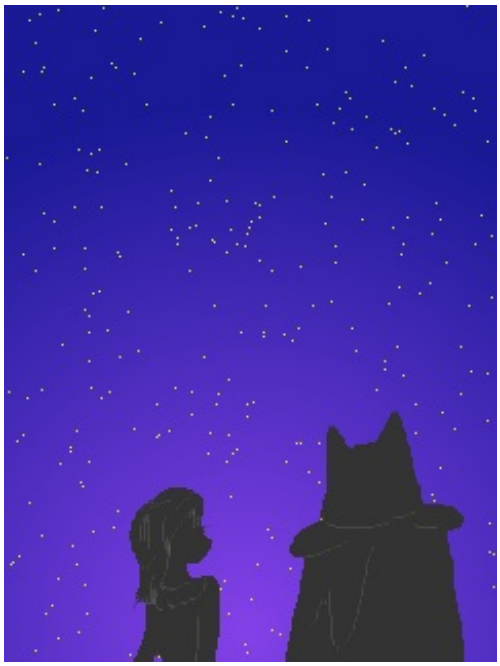
クロマオーがふるふる震えていると、芝生がガサリと音を立てて、
そこにネイが立っていた。
こんな夜に家を抜け出して、ネイは思いつめた顔をしている。

やっぱりお前か！

クロマオーは手に持っていた殻を握りしめた。グニッとやな感じ！

秘密の庭にて

「クロマオー、こんな夜にどうしたの。」



うんことは言いづらかった。大体、うんこじゃないのだ。これはエネルギーの殻であって、ヒトが忌み嫌うものではないのだ。ネイにうんこうんこ嫌がられるのは怖かった。
しかし夜中に布団を抜け出すなんて、うんこ以外何があるというのか。
クロマオーはロマンチックに決めてみることにした。

「星が今日は綺麗だからサ……。」
「曇ってるよ。」

言いながら、青春っぽく、塀の向こうにうんこを投げた。
いやうんこではないのだ。エネルギーの殻であって……（略）

「屋敷からクロマオーが見えたから、会いたくなって来たの。」
「僕もちょうど会いたかったよ。」

「クロマオーの言うとおり、偽物の愛だったよ。」

ネイは顔を伏せた。肩を落とし、疲れたように、ため息を吐いた。
やはりお前か。

「もっと近くにいる誰かに目を向けないと！」

クロマオーも必死である。

「許せないよ。友達、本当に傷ついているもの。相手の男に、脅されて、黙るしかなくて。でも世の中には、そうやってのさばる男どもが沢山いるのよね。男って嫌だね……。ほいほい付いてった友達にも問題が大きくあるけど。」

「友達というヒトは、まだ子供じゃないか。」

「子供でも、子供だからこそ、信用して良いヒトはよく選ばなきゃいけなかった。だって、ロリコンでしょ？ロリコンだよ、まだ私達子供だもん。」

「変態だよ。」

だが変態でも世間的に成功しているヒトはごまんといる。クズにも上手くやれば金は集まる。
お金なんて、何のバロメータにもならない。
時にヒトは、お金に憧れるけど。
それも妄想の産物。
今の自分の近くにどれだけ価値のあるものが潜んでいるか気付かないだけの、夢想の日々よ。

「……全部、クロマオーの言うとおりだった。クロマオーが怒ってたわけ分かったよ。」

それはきっとネイにはまだ分からないだろう、とクロマオーは思う。

「正しくないことだからだ。正しくないことは、美しくないから。」

クロマオーが怒っていたとしたら、それは
自分がまだ大人じゃないことが腹ただしかった。

僕のとしの女の子を勝手に奪われる悔しさ。

二人は黙り込んだ。ネイは薄い、柔らかそうな生地のパジャマ姿だった。
クロマオーの鳥肌がすっとたつ。
興奮を覚えていた。

胸がぎゅっと苦しくなる。

ゴツン

（え、ドクンじゃなくて？）

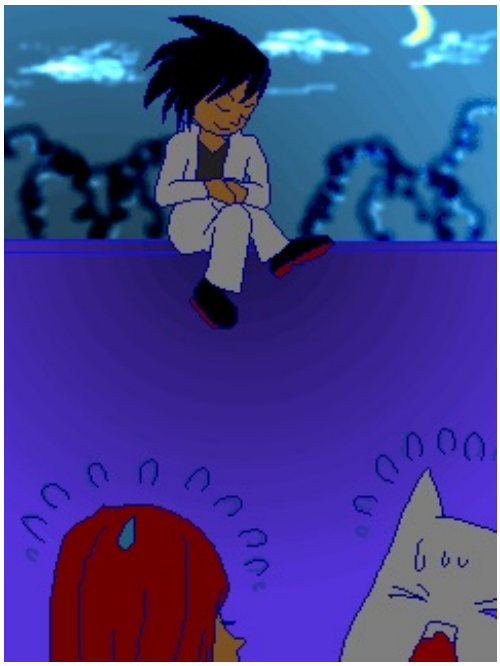
エネルギーの殻がバインと、頭に当たった後に庭を跳ねまわった。
バインバイン、バイン。一層大きく跳ねた時、

「何かぶつかったぞ、痛かったぞ！」

声に目線をあげると、
塀の上にカッコよく立つのは、シロバンチョー！

結成！

シロ「ふっ……逢い引きとは良い身分だな、おまえ。」



クロ「あわわわ。ストーカーみたいなタイミングで現れるよ！」
ネイ「人んちの塀に平気な顔でのってるよ～～！」
シロ「この二週間、どう登場するのが一番カッコいいか考えてたんだ。結果、寝込みを襲うのが一番良いと思った。暗殺犯とか、殺し屋らしいと言え。」
クロ「どっちにせよ物騒だよ！」

シロバンチョーはしかし、そこから降りる気はないようだ。塀はかなり高く、ここを勝手に越えるとマゾクにだけ電流が走るようになっている。クロマオーも近づくのは怖いので、恐る恐る見上げるのみだ。

クロ「逢い引きじゃないよ。おまえこそ、夜這いに来たんだろう？けしからんね！ネイちゃんは渡さないよ！」
シロ「夜這いではあるが、ネイは関係ない。お前だ。」
クロ「え……？」

白い薔薇がツタを伸ばし、パッパッと周囲に花開いた感じだ。クロマオーはもじもじする。

クロ「その……男同士は……！それに寒くないと……（*´Д｀*）ポッ！」
ネイ「やだっそんなのっやだっ！（*＾∀＾*）」

自分の体を両腕で抱くようにして、体を振って恥ずかしがる二人の姿に、そういや夜這いって恥ずかしい意味だったと気付くシロバンチョー。
間違えた。面倒くせえなあ。

シロ「何でもいいから。お前と話してみたいと思って来たんだ。」
クロ「体は捧げられない！」
ネイ「見るのにやぶさかではない！」
シロ「うるさいよ。真面目な話をしにきたんだ。」

シロバンチョーは困り気味に頭をかく。

クロ「シロさん、何か僕に頼みたいことがあるの？」

クロマオーは抱いていた手を、緩め、そのまま自分の口元の持っていく。考える様子だ。
頼みたいこと、それも間違いでない。ただまずは話をしなければならないと思って来た。
どう話を持っていくか、登場のことばかり考えて何も思案していなかったシロバンチョーはひとまず黙った。

意を決したような、小さな吐息が聞こえた。

クロ「シロバンチョー！僕も何でもするからお願いがあるんだ！」

シロ「？」

クロ「悪いヤツを倒して欲しいんだ。シロさんだったらきっと天誅が下せる！！」

ネイがこちらを見たので、クロマオーも瞳合わせた。そうつまり、

クロ「生徒に手を出すなんてクズヤローを制裁するんだ！」

そう、この時。
三人は初めてチームになった。

ソトゥール・バーコンは言った

『共通の敵を用意すれば、民は結びつく』

クロマオーは事の次第をシロバンチョーに説明した。ネイちゃんが悪い男に騙されて、ぼろぼろにされたと。

ネイ「チョイ待ち！違うよ……友達のことだよ！」
シロ「友達の相談の殆どは自分の話だ。」
クロマオー「良いんだ。ネイちゃんが百人の男と寝たって僕はネイちゃんのこと嫌いにならないから。」
ネイ「失礼な！クロマオーのバカーーーー！」
シロ「まあ誰でも良いが、とにかく被害があったんだな。誰でも良いが、その子は泣き寝入りか。誰でも良いが、その子が可哀想だし、何か、一発お見舞いしてやりたいな。誰でも良いが、恩が着せられる。」
ネイ「こっち見つめながら言うなーーー！！！」

ネイに正拳突きを食らわされ、クロマオーはのびた。
シロバンチョーはまだ塀の上におり、届かない。ネイは腕をまわす。
ロケットパンチが来そうで、シロは身を震わせた。

シロ「本当に誰でも良いよ。今は敵を倒すことが大事だろう？」
ネイ「でも、そんなの代理でして良いことなの？私達が被害にあった訳じゃないから、真実は藪の中だよ。」
シロ「バカか。十四歳に手を出す時点で裁かれていいんだよ。ホント、良い話題提供だ。クロマオー、起きろよ。」

頭を振りながら、何とか目覚めるクロマオー。

シロ「問題はやり方だ。」
クロマオー「寝込みを襲って、ぶん殴る。」
ネイ「叩かれただけじゃ、何も反省なんてしないわ。」
シロ「じゃあ切るか？」
クロマオー「何を？何を？」
ネイ「それは過激すぎる！」
シロ「問題をおおやけにする。」
ネイ「だめよ！シャジィがもっと傷つく！」
シロ「ああ、あいつか。何かいつも人を馬鹿にしてる女だよな……。」

ネイ「……私ってダメな女。秘密守れなかった……。」

ネイは一人たそがれて、ぐにぐにエネルギーの殻を弄んでる。それって、その、あの僕の（´Д｀*）
クロマオーは言えないで、やっぱりたそがれる。

シロバンチョーも塀の上で、夜空を見上げた。
何にも出来ないのかも、とちょっと思う。

大人達がつくりだした世界は、
子供から見ると歪んで見えるのに、
それが正しいかのように
同じ時は二度とないのにもかかわらず
時計は針を幾度もぐるぐる回していく。
僕らに出来ることなんてないんだろうか？

ふと
クロマオーはお月さまのように笑うシロバンチョーに気付いた。

クロマオー「なに？」
シロ「いや、一人で悩むより、誰かがいた方が良いんだって気付いた。」
ネイ「当たり前よ！」
シロ「だから、あのシャジィもネイに話したんだろうな。」
ネイ「……。」

クロマオー「“誰か”がいない人生はつらい。」

その瞬間ネイは、シャジィのした話を思い返していた。

そうだ。奪われたものを、奪ってやればいいのだと。

ネイの言葉が、静寂に響く。

きみの愛とかたちを壊す

シロバンチョーは闇の中を走っていた。
それほど急ぐことはないし、自分の気持ちも全く焦りはない。はっきり言って自分には関係ない話だが、クロマオーの信頼が欲しかった。その為にはまず、ネイを納得させる必要があるだけで。

クロマオーは間違いなくピカピカの正義感を持っている。しかしやり方は、彼が考えたのだが、えげつない。

考えているうちに、階段途中の、グルッテラトリスクに着いた。
今日も愛に飢えた男達に、甘い言葉を売る女主人。
グルッテラトリスクは、女主人の住居も兼ねている。男達はその事実にも胸を焼くのだ。

シロバンチョーは開け放されたトイレの窓から侵入した。キッチンとわきにあるトイレはたったのれん一枚に隔たれて、お客の席がある店舗部分と区切られている。今日も楽しげに、しりとりをする声が聞こえる。

シロバンチョーは慎重にトイレから抜け出し、足音を立てずに二階に忍び入った。有難いのが、今日も三人の客が大声で女主人に従っていたこと。二階は女主人のプライベートスペースだ。

タンスから、正直触るのが恥ずかしいパンツを取り出した。

クロマオーの計画はズサンである。それを上手いこと、件の教師に持たせ、そこを女主人に発見させろという。

パンツを持つと嫌われる。彼が、何故か本能のように抱いている恐怖を、実行するのがこの作戦だ。

『人間にとってパンツより大事なものはないんだろ？』by　クロマオー

今夜、教師はこのグルッテラトリスクに来ている。シロバンチョーは、店内の様子を注意して、潜んで待った。
握りしめたパンツが、汗に濡れた……。

そして遂に来た！このドSな計画を実行するのにちょうどいい機会が！パンツ泥棒の犯人を押し付けるちょうどいい、まさにこの時！！

奇襲を狙って、階段上の吹き抜けに移動してからの、

鉄拳制裁！！！

よし首尾よく鼻血も出た！

倒れた音に、のれんを隔てた店内が騒がしくなる。即パンツを教師に持たせて、シロバンチョーはトイレに逃げ込む。そして、窓から退散した。

残されたのは鼻血を流して倒れる教師と、女主人のパンツ（汗で湿ってる）。

上手くいった！性犯罪（淫行）には性犯罪（下着泥棒）で返す！

何か自分の手がエライ汚れた気がするが、これで女主人からは嫌われるだろう。てか、出入り禁止だろう。

ネイはこれで満足だろうか。きっとクロマオーは満足だろう。シャジィは……。

シロバンチョーは夜空を見上げた。
シャジィは、
きっと、
今は何か欠けたように思っても、
いつか満たされるのだと思う。

幸せになることに真っ直ぐだから、あの女は。

あと、おせっかいが周りにいるから、自然に敵も出来ないだろう。

とりあえず、計画は完璧に遂行した！シロはすこしの罪悪感と、クロマオーとの友情に、
月を見上げる目が同じように細まった。

やまだ

ある日の休憩時間。
お菓子が振る舞われた。シロバンチョーがマゾクの皆さんにと持って来たらしい。

『これを食べると呪われます。皮が喉に詰まって息絶えます。百年の歴史がある菓子屋やまだの老職人が作りましたが、そのあと血を吐いて死にました。千本の針がつま先に一本一本刺さったような痛みに襲われ、震えながら死にました。呪われています。おいしく頂いてくださいネ（はぁと）』

マゾク達はおのおの何か納得したように頷きながら、汗で湿った手で、まんじゅうの箱をリレーした。最後にクロマオーの黒い両手に、その箱は収まった。皆、こちらと目を合わさない。

バリトス「捨てるのはもったいないゾ……。」

バリトスはそのまま横っ跳びで逃げた。マゾクは信心深いので、皆一様に怖がって、休憩もそこそこに持ち場に戻ってしまった。クロマオーは、ひとつまんじゅうを手に取る。

茶色くて、ふわふわしている。のどに詰まったりしないと思う。しかしシロバンチョーのことを信頼できないので、半分におっかいて中身を見る。
案の定、中にメモが仕込まれていた。何だろう、この人……。

『万事うまくいった。また今夜、塀の前で待つ。これは当たりで、他のまんじゅうには、詩が入ってる。』

じゃあ読まずに捨てよう、と心に決め、クロマオーはもしゃもしゃと半分を食べ始める。

シロバンチョーはそんなに何の話がしたいんだろうか？

僕は、僕は、今話すことがあるだろうか。

落ちつく為にストレッチをした。すると突然、というか天気予報なんて当たった試しがないのだが、雨が落ち始めた。
瞬く間に窓は雨粒で光り、そのひとつひとつに、父によく似た面立ちの自分が、にらめっこするように映っている。

毎日同じ暮らしで、
特にこれといった話はないけれど、

父の話は出来るかもしれない。

父は僕にとって命を生み出してくれた人であり、
恩人であり、
罪深きものなのだ。

獣と、クロマオーと。（６）に続く。